

# 「生きること」とその意味の探究への一省察

——ヴァルネラビリティとサブシディアリティ概念を媒介に——

谷 口 照 三

はじめに

## I. 人間生活とヴァルネラビリティ

1. 「生活への三重の衝動」と「生命の技巧」
2. 人間生活の向上と「環境への働きかけ」
3. ヴァルネラビリティとその倫理的含意

## II. 「生命の技巧」とサブシディアリティ

1. 「生命の技巧」としての協働と補完関係
2. サブシディアリティ概念の歴史的系譜とその意味
3. サブシディアリティとその倫理的含意

## III. 補完関係の再構築と「生きることの意味」への展望

1. サブシディアリティとエンパワーメント
2. 社会における補完関係の構図
3. 現代社会における補完関係の問題性と課題

おわりに

---

キーワード：生きることへの三重の衝動，ヴァルネラビリティ，サブシディアリティ，協働，補完関係の再構築

## はじめに

20世紀は、科学技術への期待と懐疑が共存したが、どちらかといえば後者に対して前者がより強く支配した時代であった。21世紀に入り、まだ12年が過ぎようとしているにすぎないが、すでに科学技術への期待と懐疑は増幅され、しかも前者が強まるにつれて後者がより深まっているように思われる。それは、先端科学技術、つまりITや人工知能、バイオエンジニアリング、およびナノテクノロジーなどの、予想をはるかに上回る、実用化や研究状況の急激な進展から推察され得ることである。

かかる科学技術の動向をめぐり、さまざまな論点が提起されているが、最も多くの人々に受容され、ある程度抑止のきいた未来志向的なそれは、以下のようなものであろう。「科学技術とその応用の展開を、社会が一方的に押しとどめることはできない。しかし、それらを人間の英知によってバランスが保たれるように正しく方向づけすることは必要である。そのためには科学者たちに対して、このような情報を与え、科学の公共政策作りに積極的に参加することが、科学を専門としない一般市民の重要な責任である。科学技術とその応用の展開は、すべての人間のためにある」<sup>1)</sup>。

この引用文の第一センテンスは、第二および第三センテンスと直接結びついてはいない。それらを説得的に結びつけるためには、「科学技術への問い」と共に人間生活、とりわけ「生きることの意味」への省察を媒介しなければならないであろう。なぜならば、科学技術とその応用の展開は、すべての人間のためにある」からである。本稿は、「科学技術への問い」<sup>2)</sup>を深めるた

---

1) 木村利人稿「〈解説〉人間のための科学—バイオエシックスの視座から—」,  
シェルドン・クリムスキー著、木村利人監訳、玉野井冬彦訳『生命工学への警告』  
家の光協会、1984年、519頁。

2) この点については、初期的段階ではあるが下記の文献で試みている。谷口ノ

めに、後者の論点を、特に、人間やその生活に関わるヴァルネラビリティ (Vulnerability: 脆弱性) とそれへの応答としてのサブシディアリティ (Subsidiarity: 補完性) に焦点を当て、取り上げる。

## I. 人間生活とヴァルネラビリティ

### 1. 生活への「三重の衝動」と「生命の技巧」

「生活」、「生きること」ないし「人生」の意味の探究は、古くて、新しい課題の一つである。「よりよく生きることの」探究から哲学が、そして「<よりよく>とは何か」の探究から倫理学が生成したと言われている。また、「人類を人類たらしめるものの一つは、倫理的な側面で」あり、「人類世界が始まったのは、善と悪を区別する能力が獲得された時点だとみ」ることも出来よう<sup>3)</sup>。そこから、われわれは、往々にして、「生きることの意味」の探究は、哲学、倫理学の仕事であると短絡的に考えがちである。それも重要であるが、より大切なのは、個々人の行動実践、およびその枠組みであり、またその構築物である社会的な仕組みや制度に関して、われわれ生活者自身が「より良く生きていることになっているかどうか」と批判的に評価し、それを改善行動へと媒介することが出来るように内省することであろう。いずれにせよ、われわれは、私自身も含め、今日の社会は過去の時代より、倫理的

---

ㄨ 照三稿「REACH (EUの化学物質規正) とその経営哲学的意味」, 経営哲学学会編『経営哲学』第7巻1号, 2010年, 7月。谷口照三稿「科学技術を問う―事業経営の可能性と新しい文明の契機を求めて―」, 経営哲学学会編『経営哲学』第8巻1号, 2011年, 7月。昨年度2012年度の南山大学社会倫理研究所へのサブティカルを利用し、この問題に取り組んできた。研究成果報告「科学技術化された社会とハイデッカー技術論の射程―『専門知と一般知の接合』の前に吟味すべきこと―」(於: 南山大学社会倫理研究所)。

3) アルベール・ジャカルル, ユゲット・プラネス著, 吉沢弘之訳『世界を知るためのささやかな哲学』徳間書店, 1999年, 60頁, 参照。

に「優越している」と暗黙のうちに了解しているのではなかろうか。果たしてそうか。議論の余地がありそうである。「生きることの意味」の探究への議論は、この点にも留意しながら、進めていくべきであろう。

かかる出発点としては、哲学者A・N・ホワイトヘッド(A. N. Whitehead)の生活への「三重の衝動」(three-fold urge)と「生命の技巧」(art of life)に関する言説が参考になる<sup>4)</sup>。彼は、人間の生存のための「環境へのとっくみあい」(active attack on the environment)が①生きること(to live), ②うまく生きること(to live well), ③よりよく生きること(to live better)という「三重の衝動」からなると捉えたうえで、『生命の技巧』とは、まず第一に、生きていくことであり、第二に、満足のいくしかたで生きていくことであり、そして第三には、満足を一層高めていくことである、と語る<sup>5)</sup>。

上述の説明に関して、まず、『生きること』は、上向きの傾向をもつプロセスとして捉えてよいのか、また、『生命の技巧』には、いわゆる『生活の工夫ないし智慧』を必要とすると考えてよいのかの二点を確認しておく必要がある。後者の点は、もちろんその通りである。しかし、それのみでは不十分である。「生活の工夫ないし智慧」が「生命の技巧」となるには、ホワイトヘッドが言う理性、つまり「事実においてではなく、想像力において認められる目的達成に向けての強い衝動をみずから指揮し、さらにそれを批判するところの、経験に含まれる要因」<sup>6)</sup>としての理性が媒介する必要がある。彼は、実践的な理性と理論的理性の結合を重視する。「思弁が理性から姿をくらました」<sup>7)</sup>状況では、「生活の工夫ないし智慧」は「生命の技巧」としては不完全なものになりかねない。「活気にみちた理性という機関は、まさに

4) Cf. Alfred North Whitehead, *The Function of Reason*, Beacon Press, 1929. ホワイトヘッド著作集第8巻、藤川吉美・市井三郎訳『理性の機能・象徴作用』松籟社、1981年、1～84頁、参照。

5) *Ibid.* p.8. 上掲訳書、11～12頁。

6) Ditto. 上掲訳書、12頁。

7) *Ibid.* p.73. 上掲訳書、69頁。

新しさの機関であるとともにまた、疲労の機関でもある」<sup>8)</sup>。「安定した生」は、往々にして、「生命の技巧」における方法論が「新しさ」から、「反復」へと後退する。それは、理性が「疲労の機関」なることを意味し、「生命の技巧」に関して「ある低いレベルで安定化がおこなわれ、一步一步後退する」<sup>9)</sup>。したがって、「生きること」は必ずしも「上向きの傾向をもつプロセス」とは限らない。それ故に、「生命の技巧を助長すること」が「理性の機能」となるのである<sup>10)</sup>。

## 2. 人間生活の向上と「環境への働きかけ」

ホワイトヘッドが語る理性は、実践的(プラグマチック)、および理論的(思弁的)なものの統合であり、「生命の技巧」を助長する働きは、それらのバランスによるものと思われる。われわれ人間は、かかるバランスを持った理性を媒介に環境に働きかけ、生活の向上を図ってきた。

ホワイトヘッドによれば、アクチュアル・エンティティ(現実的存在: actual entity)としての人間ないし個人は、「自己創造的被造物」(self-creating creature)であり、「自己超越的主体」(subject-superject)である<sup>11)</sup>。それは、環境的世界から作られつつも、自らを創りだしている存在である。かかる所見には、いわゆる決定論と自由論の双方の見解が内包されている。そして、かかる要因の間のコントラストが内省化を生む理性をもたらし。人間は、それを契機として、自己を「超え出ていく」存在でもある。かかる存在への最も確実なルートが「協働」(cooperation)やパートナーシップであり、それ

---

8) *Ibid.* p.21. 上掲訳書, 23頁。

9) *Cf. Ibid.* pp.20~21. 上掲訳書, 22~23頁, 参照。

10) *Cf. Ibid.* p. 4. 上掲訳書, 8頁, 参照。

11) *Cf. Whitehead, Process and Reality: An Essay in Cosmology*, Macmillan Company, 1929. First Free Press Paperback Edition, 1969, pp.22~42. A・N・ホワイトヘッド著, 平林康之訳『過程と実在—コスモロジーへの試論—1』みすず書房, 1981年, 25~44頁, 参照。

によって「環境への働きかけ」が可能となる。それは、人間にとって、まさに、不可欠な、最も基盤的で、かつ発展的な、「生命の技巧」である。「活気に満ちた理性」は、かかる「生命の技巧」を助長し、またその協働は理性が生まれてくる基盤でもある。

かかる協働は、「環境への働きかけ」を通した「人間生活の向上」という「三重の衝動」を生きる上向きのプロセスのなかで、種々の形態や機能発展をもたらす。それらには、プリミティブな相互扶助から各種の制度、たとえば政治制度、法制度、教育制度、経済制度などや、さらにそのなかでの種々の専門的な組織体における働きが含まれる。さらに、かかる専門的な組織体において開発、応用される科学技術も協働行為そのものであることも、付言しておきたい。

上述した専門的な組織体である「政府、政府の各部門、教会、大学、労働組合、産業会社、交響楽団、フットボール・チーム」などに共通する根本的、一般的特徴として、「協力して働く努力の結合体」を見てとり、それを「協働システム」(cooperative system)と呼び、「協働の哲学」、「協働の科学」を探求し、現代経営学の基礎理論を築いたのはチェスター・I・バーナード(Chester I. Barnard)である。彼は、ホワイトヘッドと共に「決定論と自由論の受容」を共有する様に、協働の生成を以下のように説明する<sup>12)</sup>。「個人主義の哲学、すなわち選択や自由意思を重視する哲学の最も普遍的な意味は、『目的』という言葉にある。これとは反対の哲学である決定論、行動主義、ソーシャルイズムの最も一般的な表現は『制約』である。個人には目的があるということ、あるいはそうと信じること、および個人に制約があるという経験から、その目的を達成し、制約を克服するために協働が生じる」。

---

12) C. I. Barnard, *The Functions of the Executive*, Harvard Business Press, 1938, p. 22. 山本安次郎・田杉競・飯野春樹訳『経営者の役割』ダイヤモンド社、1968年、23頁。

### 3. ヴァルネラビリティとその倫理的含意

かように、人間には環境による被造物であるが故の制約、すなわち人間は万能ではなく、能力に限界があるが、他方人間は「三重の衝動」を自己創造的に生きようとし、その克服への努力の一環として協働を選択する。しかしながら、この協働へのプロセスをより鮮明にするには、「制約」や「能力の限界」をヴァルネラビリティに変換することが効果的であるように思われる。それは一般的には「脆弱性」、つまり「脆くて弱いこと」の、また「傷つきやすさ」の「可能性」を意味している。われわれ人間は、多かれ少なかれ、これを所有している。そこには、すべての人に共通する普遍性と、各自によって異なる多様性がある。しかしながら、前者はともかく、後者に関して、われわれは、マイナス効果を持つものとして、この特性を否定的に評価しがちである。したがって、このような場合、通常、それは隠匿される。とりわけ、「競争」が過度に強調される時、その傾向が高まることになる。それは、「協働」が必要にもかかわらず、協働を非効果的にし、また阻害することにつながるであろう。

このように、ヴァルネラビリティの意味を「脆弱性」のみに押し込めているならば、「生命の技巧」の発露への扉は閉ざされよう。かかる扉を開けるためには、三つの点が必要である。まず第一点は、われわれの中で広くヴァルネラビリティの普遍性と多様性に関して認識を共有することである。第二点は、一人ひとりがその「共感を自分の気持ちに取り込み」、「他者の窮状、つまりその苦しみを自分のものとして感じること」、つまり感得することである<sup>13)</sup>。そして第三点は、前者と後者を媒介することに欠かせない「脆弱性」に対する取り組みないし態度の開示である。なお、これらの三点の根底には、

---

13) Cf. Jeremy Rifkin, *The European Dream: How Europe's Vision of the Future Is Quietly Eclipsing the American Dream*, Jeremy P. Tarcher /Penguin, 2004, p.270. ジェレミー・リフキン著、柴田裕之訳『ヨーロッパ・ドリーム』日本放送出版協会、2006年、351頁、参照。

「対話があること」が極めて重要であることを付言しておきたい。

『果敢なる挑戦』(*Daring Greatly*)と題する著書の中で、上述の文脈に適合的にヴァルネラビリティをわかりやすく再定義したのは、ヒューストン大学ソーシャルワーク大学院のブレネー・ブラウン(Brene Brown)である<sup>14)</sup>。彼女は、脆弱性に加え、ヴァルネラビリティを「不確実性、リスク、生身をさらすこと」と定義する<sup>15)</sup>。それは、「自分の弱さやもろい部分を認め、傷つく可能性と向き合おうとするかどうかで、どれだけ勇気があるのか、どれだけ明確な目的を持っているかどうか」がわか」り、「また傷つきやすい自分の生身をさらせるかどうかは、不安や人とのつながりの断絶度合をはかる尺度になる」からである<sup>16)</sup>。その意味で、「ヴァルネラビリティは、愛、帰属意識、喜び、勇気、共感、そして創造性をもたらす基盤」であり、また「期待」や「アカンタビリティ(accountability)」, ならびに「信頼性(authenticity)の源である」<sup>17)</sup>。「アカンタビリティ」については、若干説明が必要であろう。それは、通常、「説明責任」と言われるが、自己にとっては自己が置かれている状況とそれに対して自分自身をどのように位置づけているか、またそれを基盤に何をしようとしているのかの開示のことである。また、それは他者にとっては彼、彼女との関係形成のための意思決定基盤となるものでもある。このように、ブルネー・ブラウンは、「生きる目的と意味を与え」る「他者とのつながり」(connect with others), パートナリーシップ、協働への扉を開く可能性を、「ヴァルネラビリティのパラドックス」によってうまく説明している。かかる意味でのヴァルネラビリティは、道徳、倫理の基盤でもある。

---

14) Brene Brown, *Daring Greatly: How the Courage to be Vulnerable Transforms the Way We Live, Love, Parent and Lead*, Penguin Books, 2012. ブレネー・ブラウン著、門脇陽子訳『本当の勇気は「弱さ」を認めること』サンマーク出版、2013年。

15) *Ibid.*, p.34. 上掲訳書、43頁。

16) *Ibid.*, p.2. 上掲訳書、14頁。

17) *Cf. Ibid.*, p.34. 上掲訳書、43頁、参照。



「不確実性こそ、道徳の人間の本拠地であり、その土壌でのみ道徳は芽吹き、生い茂ることができる」<sup>18)</sup>。

## Ⅱ. 「生命の技巧」とサブシディアリティ

### 1. 「生命の技巧」としての協働と補完関係

上述のブルネー・ブラウンの説明を頼りに、「協働」へのプロセスとその発展を展望するならば、以下のように言えるかもしれない。「アカンタビリティ」が「期待」と「信頼性」を生み、それが人々の間に「共感」を生み、さらにそれを基礎に「愛」、より一般的、抽象的に表現するならば「他者への配慮 (care)」が生まれ、またそれによってあらゆる創造性の基盤であり、それ自体その一例である「協働」が生成し、そこから「帰属意識」、「喜び」、「勇気」が生まれてくる。さらに、「勇気」が「アカンタビリティ」へとスパイラル・アップし、上向きのスパイラル・プロセスが形成される。

しかしながら、必ずしも、現実はこのように常に上向きの傾向を示すものではない。「他者とのつながり」は、「われわれにとって生来なもの」と言われているが<sup>19)</sup>、それを意味ある形で引き出すためには、先のプロセスを構成する要素のなかで、とりわけ「アカンタビリティ」と「他者への配慮」のセットが重要であり、それらを弱めることなく、助勢する必要がある。「他者と共に在る」(being with others) 前に、相互に「他者のために在る」(being for others) ことが先行しなければならない。イギリスの社会学者ジグムント・バウマン (Zygmunt Bauman) は、この点をうまく言い表している。「他者のためにあるがゆえに、わたしは存在する。あらゆる実践的な意味と目的

---

18) Zygmunt Bauman, *The Art of Life*, Polity Press, 2008, p.107. ジグムント・バウマン著、高橋良輔・開内文乃訳『幸福論—“生きづらい”時代の社会学—』作品社、2009年、206頁。

19) Cf. Brene Brown *opcit.*, p.8. 上掲訳書、19頁、参照。

からして、『存在』は『他者のための存在』と同義語なのである」<sup>20)</sup>。

上述の「『協働』へのプロセスとその発展」は、「生命の技巧」のプロセスである。その基本的な土台となるのがヴァルネラビリティであり、その下の「他者への配慮 (care)」が人のつながりをもたらし、それがやがて範囲を広げ、また「形」をもちパートナーシップや協働へと発展する。諸制度は、それ自体より大きな広がりをもった協働の公式的なシステムであり、それぞれの制度内に専門的で、公式的な種々の協働システムを内包している。これらの種々の協働努力のシステムは、「生への三重の衝動」による「生きるプロセス」の内容を方向づける「補完関係」の複雑なシステムである。この問題は、次節のⅢにおいて扱う。本節では、協働の本質ともいえる補完関係形成の原則、考え方であるサブシディアリティ（補完性）について語りたい。

## 2. サブシディアリティ概念の歴史的系譜とその意味

イギリスの経営学者であるチャールズ・ハンディ (Charles Handy) は、サブシディアリティを「古くからあるアイデアであるが、今日の世界のために再び考え出されたものである」<sup>21)</sup>と、1990年代の初期という早い時期から、高く評価している。「古くから」とは、ある説によるとアリストテレス (Aristotle) や13世紀のトマス・アクィナス (Thomas Aquinas) にまでその意味的な淵源を辿ることができる<sup>22)</sup> からであるが、ハンディが想定しているのは、1892年の最初の回勅であるローマ教皇レオ13世 (Leonis XIII) の『レールム・ノヴァルム』(*Rerum Novarum*) 以来から提言されており、

20) Zygmunt Bauman, *opcit.*, p.122. 上掲訳書, 233頁。

21) Charles Handy, *The Empty Raincoat: Making Sense of the Future*, Arrow Books, 1995, p.100. チャールズ・ハンディ 著, 小林 薫訳『パラドックスの時代—大転換の意識革命—』The Japan Times, 1995年, 167頁。

22) 安江則子著『欧州公共圏—EUデモクラシーの制度デザイン—』慶應義塾大学出版会, 2007年, 14頁, 参照。

1931年のピウス11世 (Pius XI) によるローマ教皇回勅『クワドラジェシモ・アンノ』(Quadragesimo Anno) において「『社会哲学』のもっとも重要な原理の一つであると」した補完性である<sup>23)</sup>。

それは、「社会哲学に定着した不動の最も重大な原則」とされ、そこでまず第一に強調されているのは、「個人がその発意と努力とによって果たしうる仕事を奪って、共同体に移管することが重大な不正であるように、規模の小さい集団からその果たしうる役割を奪って、より広大でより高次な集団に託することは、不正を犯すことであり、社会秩序をはなはだしく損ない、乱すことになります」<sup>24)</sup>、という点である。この原則は、「権限は可能な限り行為の発生するところに帰属させることを要請する」<sup>25)</sup>。

ハンディが「今日の世界のために再び考え出された」と表現したものは、直接的なものとしては、EUのマーストリヒト条約(1992年2月27日締結、1993年11月1日発効)で公式的に採用された補完性原則(Principle of Subsidiarity)である<sup>26)</sup>。それは、上述のキリスト教における「社会哲学に定着した不動の最も重大な原則」を受け入れたものであり、EU条約の前文やEU条約5条などで、その影響を確認できる。例えば、EU条約5条は、「連合の決定は市民に対してできる限り開かれた形で、かつできる限り市民に近いところで行われる」と規定されている。またEU条約5条3項は、以下の

---

23) Cf. *Quadragesimo Anno Official Text 1931*. 教皇庁正義と平和評議会編、マイケル・シーゲル訳『教会の社会教説綱要』カトリック中央協議会、2009年、156～178頁、参照。

24) *Ibid.*, paragraph 79. 上掲訳書、157頁。

25) Charles Handy, *The Elephant and the Flea: Reflections of a Reluctant Capitalist*, Harvard Business School Press, 2001, p.72.

26) EUの補完性の原理については、主として以下の文献を参照。安江則子著『欧州公共圏—EUデモクラシーの制度デザイン—』(上掲)、中西優美子著『法学叢書 EU法』新世社、2012年。

内容となっている<sup>27)</sup>。「補完性原則の下で、連合は、その排他的権限に属さない分野においては、提案される行動の目的が構成国の中央レベルまたは地域及び地方レベルのいずれにおいても十分に達成することができず、提案される行動の規模または効果のために連合レベルでより良く達成されうる場合に限り、行動する」。これらは、「市民接近原則」であると同時に、「自己抑制的原理」を伴った「権限配分の原則」であることを意味している<sup>28)</sup>。

### 3. サブシディアリティとその倫理的含意

このようなEUの補完性原理は、先ほど、キリスト教の伝統の下にあることに触れたが、実は、それは「深層的に」の意味である。「表層的には」、むしろその反対で、EU条約の前文へのヴァチカンからの「神とキリスト教義」についての言及要請に、起草協議会は「私たちの唯一の旗印は非宗教主義だ」として、応じることはなかった<sup>29)</sup>。しかし、それは、「神」を全面的に否定するのではなく、キリスト教の伝統にある「汝の隣人を愛せよ」や「普遍的な人権」、「人間性の尊厳」を「神意の名において唱え」るのではなく、「人類の現実を見つめる私たちの明晰さの名において」<sup>30)</sup>、キリスト教も含め種々の宗教や文化、人々の根本的な考え方に通底するものとして、昇華させ、捉え直している、と理解すべきであろう。あまりにも有名な「神は死んだ」は哲学者ニーチェ（Friedrich Nietzsche）の言葉であるが、その現代的意味は以上のように捉えるべきであろう。

このような視座に立った場合においてのみ、欧州委員会議長のアドバイザーを務めたアメリカの文明評論家であるジェレミー・リフキン（Jeremy Rifkin）が以下のように述べるように、補完性原理がEUの政策原理である

27) 中西優美子、上掲書、107～108頁。

28) 安江則子、上掲書、16～18頁、参照。

29) Cf. Jeremy Rifkin, *op.cit.*, p.211. 前掲訳書、276頁、参照。

30) アルベール・ジャカル、ユゲット・ブラネス、前掲訳書、72頁、参照。

と共にその正統性を説明する原理足りるのである。「EUの正統性は、領土支配や市民に税を課したり、服従を強要するために警察や軍を動員したりする権限にあるのではなく、行動規範にこそある。その規範は、普遍の人権を必要条件とし、法律や規則、指令を通して運用されるが、もっとも重要なのは、その運用が地元、地域、国、超国家、グローバルの各次元で活動する多様な参与者との取り決めや会話や交渉の継続的プロセスによっている点だ」<sup>31)</sup>。ここには、先に引用した『クワドラジェシモ・アンノ』のセンテンスの続きであり、パラグラフ79の最後の言葉、つまり「あらゆる社会活動の本来の目的は、社会の構成員を助けることであって、それを減ぼしたり、吸収したりすることではありません」<sup>32)</sup> という視座の下での「市民接近原則」であると同時に、「自己抑制的原理」を伴った「権限配分の原則」である」補完性の原則とその実践的性質としての「動態的で柔軟なプロセスである」<sup>33)</sup> ことが、よく表されている。

以上のような理解に立つならば、以下のハンディの言説に、同意できるように思われる。「深いところの本心ではサブシディアリティは道德上の至上命令である。パワーは人々に属している。人々が責任をもってそれを実行するのを助けるのは、[私はあらゆる制度やそれを構成する各種の協働システムも加えなければならないと思うが]、マネジャーの、教師の、あるいは両親にとっての重大な課題である」<sup>34)</sup>。

---

31) Jeremy Rifkin, *op.cit.*, p. 209. 前掲訳書, 273頁。

32) *Quadragesimo Anno Official Text 1931*, paragraph 79. 教皇庁正義と平和評議会編, 前掲訳書, 157頁。

33) 安江則子, 前掲書, 38頁。

34) Charles Handy, *The Empty Raincoat.*, p.127. 前掲訳書, 207頁。

### Ⅲ. 補完関係の再構築と「生きることの意味」への展望

#### 1. サブシディアリティとエンパワーメント

サブシディアリティ概念は、制度や政治的領域のみならず、人々の日常生活や種々の制度の中での専門的な協働システムや組織（この二つの概念は厳密には区別しなければならないが、ここでは同一のものと捉えておく<sup>35)</sup>）のなかでの人間生活における補完関係を解明、説明するために応用し得る。補完関係は、既に見てきたように、道徳的、倫理的観点からも、またプラグマティックな立場においても適切な権限構成、配分の問題であった。しかし、それは、同時に責任 (responsibility: 応答可能性) の構成配分の問題でもある。人間生活向上のためには、補完関係の構築と再構築が必要であるが、それらの探究は、常に課題性の下にあり、漸進的、動的でかつ柔軟なプロセスとならざるを得ない。

これまでの考察により、サブシディアリティ概念の特徴の一つとして、権限よりも行動規範に、また権限よりも責任、応答可能性に、力点が置かれなければならない、と考えてよいように思われる。既に言及したけれども、人々は基本的に相互の「他者への配慮」を基礎に、「他者のために在る」存在として「応答可能性を拓く」存在でもある。また、「パワーは人々に属している」。しかしながら、人々は、ヴァルネラビリティのなかにいる。これらの点を勘案するならば、人々は、自己の応答可能性を拓くために、自己が保有する「権限」を制度や各種の協働システム、組織に委ねる、つまり委任する。

ここで若干注意を要する点がある。現代においては、それとは異なり、あらゆる協働システムや組織において、これまで見てきたサブシディアリティ

---

35) C・I・バーナードは、協働システムは、物的システム、人的システム、社会的システムが「活動のシステム」である組織によって統合された存在である。C. I. Barnard, *op.cit.*, p. 65. 前掲訳書, 67頁。

の考え方に基づくものばかりでなく、それとは無関係に、「体系的な権限委譲」が「上から下へ」、「全体から部分へ」と実施され、自律的な意思決定が推奨され、そこに留まることなく、「自己責任」の下での行動や生活が避けがたいものになりつつある。この傾向は、およそサブシディアリティ思想とは相いれないものである。「権限の委譲」は、通常理解のように、「上から下へ」、「全体から部分へ」ではなく、正しくはまったくその反対で、「下から上へ」、「部分から全体へ」の「権限の委譲」である。かかる観点から、チャールズ・ハンディは、通常の「権限の委譲」をサブシディアリティの思想に沿って「逆委任」(reverse delegation)と命名した<sup>36)</sup>。それは、「返還」と言った方が分かりやすい。サブシディアリティの思想に従うならば、「権限は可能な限り行為の発生するところに帰属させること」が要請されるが、それは、「逆委任」であり「返還」である。「可能な限り」という点は、種々の行為主体の様々な社会状況のなかでのエンパワメント (empowerment: 力をつけること) の状態を勘案して行うべきことを意味している。しかも、「逆委任」や「返還」を実行した後も、「人々が責任をもってそれを実行することを助ける」点に留意すべきであろう。かかる二つの要因のセットがサブシディアリティそのものである。人間生活の向上は、かかる意味での、すなわち応答可能性を拓くための最適な「権限配分」の再構築という補完関係の発展である、と言えよう。

## 2. 社会における補完関係の構図

それは、「動態的でかつ柔軟なプロセス」の下での漸進的な発展であり、「ソーシャルな状況」(the social) から「ソシエタルな状況」(the societal) が派生する。

「ソーシャルな状況」とは、非公式的で、人格的な相互関係であり、人々

---

36) Cf., Charles Handy, *The Empty Raincoat.*, p.114. 前掲訳書, 191頁, 参照。

が生きていく原初的な「他者と共に在る」社会状況である。しかし、すでに述べたように、真に「他者と共に在る」には、相互に人々は「他者のために在る」ことが必要である。この点の理解には、今道友信が「我思うゆえに我あり」(Cogito, ergo sum: コギト・エルゴ・スム)に倣い、「私は(誰かに)応答している、ゆえに私は存在する」(Respondeo, ergo sum: レスポンデオー・エルゴ・スム)と言っていることも参考になろう<sup>37)</sup>。

「ソシエータルな状況」とは、公式的な役割関係、契約関係である。それは、バウマンに言わせれば、「訓練や執行の超個人的機関 (supra-individual agencies of training and enforcement)」<sup>38)</sup>によって作られる状況ということになる。

「ソーシャルな状況」をより具体的に表現するならば、「市民的公共圏」(第1図のA)<sup>39)</sup>が適切であろう。一方、「ソシエータルな状況」は、あまり適切に表現できないが、「役割分担社会」(C)と呼んでおこう。前者から後者の派生には、「非公式的な市民的社会組織 (informal civil society organization)」(AB)が契機となるように思われる。かかる組織は、まだ構造化されていなく、非公式的なもので、「前NPO」(pre-nonprofit-organization)や「前NGO」(pre-nongovernmental-organization)と言ってよい。「市民的公共圏」と「役割分担社会」間の「応答可能性を拓くための最適な『権限配分』の再構築という補完関係」の漸進的な「動態的でかつ柔軟なプロセス」が働き、「市民的公共圏」やそこで生活する人々がエンパワメントされたこと、また「補完関係の失敗」などが契機となり、NPO・NGOなどの構造化された「公式的な市民的社会組織 (formal civil society


37) 今道友信著『エコエティカ生圏倫理学入門』講談社学術文庫、1990年、104頁。

38) Zygmunt Bauman, *Modernity and the Holocaust*, Polity Press, 1989. p.179. ジクムント・バウマン著、森田典正訳『近代とホロコースト』大月書店、2006年、233頁。

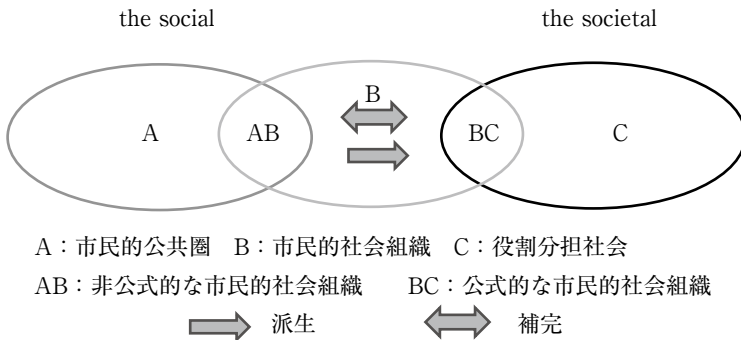
39) 安江則子、前掲稿、14頁。



organization)」（BC）が登場してくる。それは、「市民的公共圏」と「役割分担社会」を媒介し、それらの補完関係を強化するに違いない。

第1図の  は、相互補完関係を示すが、基本的な関係は「市民的公共圏」を「役割分担社会」が補完することである。しかし、上述の「公式的な市民的社会組織」の媒介機能は相互補完関係を強化する。「市民的公共圏」からの「役割分担社会」への補完は、そのみならず、前者に属する人々が後者を構成する種々の協働システムや組織の構成メンバーとして特定の役割を担うことによって果たされる。ここに、「補完関係のパラドックス」が存在する。この点は、「サブシディアリティのヴァルネラビリティ」と言ってもよい。かかるパラドックスを克服するには、根本的に、このヴァルネラビリ

第1図 社会における補完関係



第2図 市民的社会組織が媒介する重層的社会



A: 市民的公共圏 B: 市民的社会組織 C: 役割分担社会

ティへの共感と積極的なアプローチを通した新たなサブシディアリティの革新が不可欠であろう。このような方向に向けられた「動態的でかつ柔軟なプロセス」が起動し、また「市民的社会組織」の媒介機能が活性化するならば、第2図に示したような、「重層的社会」の形成の可能性が広がるであろう。

### 3. 現代社会における補完関係の問題性と課題

「補完関係のパラドックス」の発現は、「役割分担社会」からの「市民的公圏」への補完関係が前者の質に、またその質が後者に属する人々の前者への貢献の質に依存するという循環プロセスに、基本的に起因する。しかしながら、そこには、パラドックスを脱し、好循環を描く可能性もあることを否定できないが、大きな制約がある。

それは、「個人と組織の対立」、「個人と社会の対立」というテーマで語られてきた問題であり、またより深刻な問題はそれらと結びついた「役割分担社会」やそれを構成する種々の協働システムや組織の「自己目的化」である。かかる傾向は、近代における役割分担の専門化とその自立性への動きと連動しており、さらに、工業化の進展と科学技術の振興を土台とする経済成長優先政策のための政治セクターとビジネスセクターの役割強化もつけ加えなければならない。それらは、補完性の強化をその根拠としながら推し進められるが、やがてかかる補完関係を生み出す文脈は薄れ、そこに関わる多くの人々において「市民的生活圏」への感覚は遠ざかり、意識は「役割分担社会」へと集中し、あたかもそれが「社会」そのものであるかの「錯覚」が浸透していく。その結果は、「政府の失敗」であり、「市場の失敗」であったと言っても過言ではなかろう。それらの克服は、サブシディアリティ思想の下での補完関係の再構築への「果敢な挑戦」しかあり得ないであろう。

そのような「失敗」が話題に上がる前後に、社会の人々の「想い」に「気づき」、それを「形に」しようとするNPOやNGO等の市民的社会組織（CSO）への関心が高まった。それ以降、「政治セクター」を第1セクター、「ビジネスセクター」を第2セクター、そしてNPOやNGO等のCSOを含む「市民的

社会セクター」を第3セクターと言いつつ、一般的になった。ここに、上述のような「役割分担社会」の位置づけが広く社会において受け入れられていたことが、認められる。ジュレミ・リフキンによれば、「市民社会は・・・『第三部門<sup>セクター</sup>』ではなく、第一部門<sup>セクター</sup>だと、市民社会擁護者は不平を言う」<sup>40)</sup>。当然である。「政治セクター」を第1セクター、「ビジネスセクター」を第2セクターと言うのは、近代に特殊的な現象を一般化しているにすぎなく、人間生活の発展を存在論的、歴史的視座、およびサブシディアリティの思想から捉えるならば、むしろ「市民的社會セクター」が「第1セクター」と言わざるを得なく、「役割分担組織」である「ビジネスセクター」や「政治セクター」こそ、その延長と考えるべきであろう。さらに、今日、特にEUにおいて、「市民的公共圏」への直接的なサポートと共に、「市民的公共圏」と「ビジネスセクター」や「政治セクター」を媒介し、それらの補完関係の充実を図る、固有の、また重要な役割をアピールするため、NPO（非営利組織）、NGO（非政府組織）ではなく、市民的社會組織（CSO）と表現する場合が多い<sup>41)</sup>。

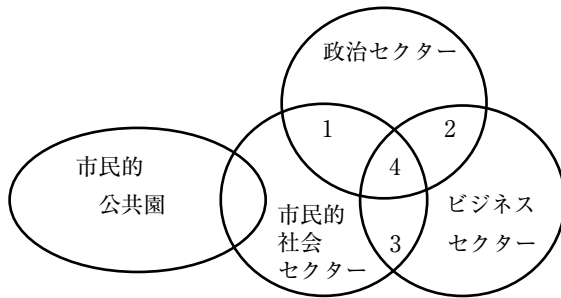
このような動向と共に、21世紀に入り、「市民的社會セクター」、「ビジネスセクター」、「政治セクター」間の多様で重層的な関係が模索されてきている。それは、「市民的公共圏」と「役割分担社会」との補完関係の再構築への探究でもある。とりわけ、企業の社会的責任（Corporate Social Responsibility: CSR）を巡るマルチ・ステイクホルダー（多元的利害関係者）によるパートナーシップ、連帯（solidarity）、つまりリレーショナルCSR（第3図）は、企業の事業活動に関わる環境問題や人権問題の、また（the socialとthe societalを含んだ）社会における歴史的制度的に引き起こされた諸問題の解決に向けての取り組みを通して、われわれが共有する課題への取

---

40) Jeremy Rifkin, *op.cit.*, p.237. 前掲訳書、307頁。

41) Cf., Ditto. Andrew Crane, Dirk Matten, *Business Ethics: A European Perspective*, Oxford University Press, 2004, pp.343～383.

第3図 政治セクター，ビジネスセクター，市民的社会セクターの補完関係



1. 市民的社会—政治関係      2. ビジネス—政治関係  
3. 市民的社会—ビジネス関係      4. リレーショナルCSR

出典：Barth, Regine, and Franziska Wolff, ed., *Corporate Social Responsibility in Europe: Rhetoric and Realities*, Edward Elgar Publishing, 2009. p.7.の  
Figure1.1 Relational model of CSRを下に，いくつか修正，加筆し，作成。

り組みに可能性を拓いている<sup>42)</sup>。

このような状況の中で，留意すべき論点がある。「ビジネスセクター」，「政治セクター」での種々の組織への貢献者も，かかる貢献が真に「市民的公共圏」に対する補完になり得ているかどうか，また，同時に，かかる組織においてサブシディアリティの理念が具現化されているか否かと自問自答することが必要とされる，という点である。さらに，これに応答すべく，個々の組織は貢献者が判断し得るように彼，彼女の意思決定基盤として情報を開示し，アカンタビリティを果たす必要がある。その基盤として，各々の組織の関係

42) この件に関しての詳しいことは，以下の拙稿を参照されたい。谷口照三稿「事業経営の本質と科学技術連関—事業経営としてのCSRの可能性の探究—」『社会と倫理(創設30周年記念号)』(南山大学社会倫理研究所)第25号，2011年11月。『『内省的近代化』を文脈とするCSR解釈の試み—CSRの可能性を展望する—』『桃山学院大学総合研究所紀要』第37巻第3号，2012年3月。

者は、貢献者には「市民的公共圏」と「役割分担社会」を構成する当該組織の「<sup>ツインシティズンシップ</sup>二重市民権」<sup>43)</sup>が存在することへの認識を高め、正しく位置づけることが肝要である。

われわれの日常の生活を振り返ってみるならば、われわれは「二重市民」と言うよりも「多重市民」と言った方が現実的であろう。われわれは、同時に、いくつかの協働システムや組織に加わり、関わり、生きている。そして、C・I・バーナードが言うように、そのようなプロセスにおいて、いくつかの行為準則ないし道徳準則を自己の内へと内面化し、それらのバランスを取ろうと、悪戦苦闘している<sup>44)</sup>。それは、まさに、応答可能性を拓かんとする努力であろう。かかる応答可能性の拓きは、個人の悪戦苦闘のみでは望みが薄い。それは必要条件ではあるが、かかる「拓き」を促進するような、充分条件として、他者や係わりのある当該組織の助けが必要であろう。「応答可能性を拓くこと」への共感と連帯は、われわれが生きていくための「必須要件」と言えるであろう。

## おわりに

「生きることの意味」の探究への第一歩として、本稿では、哲学者ホワイトヘッドが述べた「①生きること (to live), ②うまく生きること (to live well), ③よりよく生きること (to live better) という『三重の衝動』」を生きる「生命の技巧」を、ヴァルネラビリティとサブシディアリティ概念を手掛かりに解釈しようとしてきた。そして、「ソーシャルな状況」としての「市民的公共圏」と「ソシエータルな状況」としての「役割分担社会」との、また個人と組織との補完関係が双方の「応答可能性の拓き」を促進するように、

---

43) Cf., Charles Handy, *The Empty Raincoat*, pp.101~114. 前掲訳書, 170~188頁, 参照。

44) Cf., C. I. Barnard, *op.cit.*, pp. 258~284. 前掲訳書, 269~297頁, 参照。

「動態的でかつ柔軟なプロセス」の下で漸進的に再構築される「営み」として、「生命の技巧」を考察してみた。

かかる「営み」を根本的に基礎づけるのは、ヴァルネラビリティ、つまり脆弱性とそれに対する能動的な受容、そしてそれらに関する相互の共感を媒介とした「パートナーシップ」や「協働」、および「連帯」である。かかるプロセスに「リズム」を創り込んでゆき、しつとりと味わいのある「満足を高めて生きること」(to live better)へと橋渡しをするのは、サブシディアリティである。

しかしながら、現実には、一方で上述のような方向への動きも確かに進展しているのではあるが、他方で、それとは異なり、あらゆる協働システムや組織において、これまで見てきたサブシディアリティの考え方に基づくものばかりでなく、それとは無関係に、「体系的な権限委譲」が「上から下へ」、「全体から部分へ」と実施され、自律的な意思決定が推奨され、そこに留まることなく、「自己責任」の下での行動や生活が避けがたいものになりつつある。この傾向は、およそサブシディアリティ思想とは相いれないものである。いわゆる、「個人化社会の進展」<sup>45)</sup>である。そこでは、社会的な状況に起源をもつ問題も「個人の責任」に還元される傾向が強まっている。それは、コスト削減によって特徴づけられた「生産性」の観念からもたらされている。「この生産性は、一人ぼっちsolitaryの『t』の字を、連帯solidaryの『d』の字に押しつけるところから引き出されている」<sup>46)</sup>。それは、補完関係の崩壊に向かうことと同義である。

その傾向に歯止めをかけることができるのか。かなり難しい状況であるが、少なくとも、サブシディアリティの考え方を正しく理解し、その浸透を図る

---

45) この点に関する詳しいことは、以下の文献を参照されたい。Zygmunt Bauman, *The Individualized Society*, Polity Press, 2001. ジグムント・バウマン著、澤井敦/菅野博史/鈴木智之訳『個人化社会』青弓社、2008年。

46) Zygmunt Bauman, *The Art of Life*, p.130. 前掲書、250頁。

ことから、始めざるを得ない。ハンディは言う。「サブシディアリティは、意味がいっぱい詰まっている古い言葉である。時代遅れのように聞こえるかもしれないが、現代的なパンチ力を持っている言葉である。それを捨て去るというのは愚かというべきであろう」<sup>47)</sup>。同感である。さらに、それとの関連で、ヴァルネラビリティの有意味性を現代の社会問題の検討をお通して引き出していくことにより、「連帯のsolidary」の「d」の字に押しつけられた「t」を取り除き、差違性の相互承認の下に人々が「生き生きとした」連帯（inclusive solidarityと呼びたい）の可能性を展望することを今後の課題としたい。

付記：本稿は、2012年度桃山学院大学総合研究所共同研究プロジェクト『『生きること』の意味とサービス概念の哲学的・神学的再考—建学の精神に関連づけて—』（11共124）の研究成果の一部である。また、筆者は、2012年度の特別国内研修（長期1年）を得、2012年4月1日から2013年3月31日まで、南山大学社会倫理研究所に客員研究所員として滞在した（研究テーマ「科学技術に関する哲学的・倫理学的研究」）。本稿はその研究成果の一部でもある。いずれの研究会においても、若干表現は異なるが同様なテーマで報告し、種々の有益なコメントを頂いた。この場を借り、関係者の皆様に、心より御礼申し上げます。

---

47) Charles Handy, *The Empty Raincoat*, p.128. 前掲訳書, 208頁。

# **Vulnerability, Subsidiarity and “the Art of Life”**

Teruso TANIGUCHI

The expectation and skepticism for science and technology coexisted in the 20<sup>th</sup> century. In that century, however, the skepticism was more focused on rather than the expectation. It has only been 12 years since the 21<sup>st</sup> century started. However, the expectation and skepticism for science and technology has already increased, and it seems that the higher the expectation is, the deeper the skepticism is. It is estimated that it is because the rapid development of most advanced science and technology, such as IT, artificial intelligence, bioengineering, nanotechnology, was far more than what we expected.

Various contentions are proposed for the tendency of science and technology. The forward-looking contention that would be accepted by most people and has certain level of restraint would be the following. “The application and development of science and technology cannot be suppressed by the society. However, it is necessary for humans to balance and point it to the right direction with their intelligence. It is the responsibility of the ordinary citizens who do not specialize in science to provide such information to scientists and actively participate in the making of public policy for science. The application and development of science and technology is for all humans.” The first sentence of this quote is not directly connected to the second and the third sentence. It is



necessary to mediate the “questioning for science and technology” with human life, especially the consideration of the “meaning of life” in order to connect these persuasively. It is because “the application and development of science and technology is for all humans.”

This paper attempt to interpret concept of the vulnerability for humans and their lives and its response, subsidiarity, based on the concept of “art of life” and “a three- fold urge: (i) to live, (ii) to live well, (iii) to live better,” mentioned by a philosopher, Alfred North Whitehead, in order to deepen the “questioning for science and technology.” It also examines the “art of life” as a “deed” that is reconstructed under “the dynamic and flexible process” as the social as the “civil public sphere,” the societal as “role-sharing society,” and as the complementary relationship of individual and organization promotes the “openness to response possibility.”

The fundamental of this “deed” is vulnerability and its dynamic acceptance, and “partnership” and “cooperation” as well as “solidarity” that mediate the mutual sympathy that relates to the vulnerability and its dynamic acceptance. And subsidiarity is the one that creates the “rhythm” for the process and bridges it “to live better” with profound meaning.